

フレーベルの「生命」概念とその思想的背景

— 18世紀ドイツ思想の転換との関連に関する考察 —

野中 洋志・小倉 定枝

The 'Leben' concept of Fröbel philosophy and 18 century German history of thoughts as the background

Hiroshi NONAKA・Sadae OGURA

Abstract

The purpose of this paper is to understand the factors which cause the confusion over the concept of "subjectivity". The confusion is seen in the child care system which puts an emphasis on subjectivities of children as "child-centrism". It is necessary to comprehend the essence of Fröbel's thoughts about education to order the confusion over the concept of "subjectivity". Therefore, this paper investigates the thoughts of German romanticism and German idealism. By doing so, the range where Fröbel thoughts reach will be examined.

Key-words

Fröbel, the thought of German romanticism, the philosophy of Shelling, child-centerism, subjectivity

1. 問題の所在と目的

(1) 日本におけるフレーベル思想の展開と問題

現在、日本の保育においては子どもの「主体性」を重視している。この子どもの「主体性」重視の背景にあるのは「子ども中心主義」である（無藤2009, p.19）^(注1)。その源流はルソー（J.J.Rousseau,1712-1778）、ペスタロッチ（J.H.Pestalozzi,1746-1827）、フレーベル（F.W.A.Fröbel,1782-1852）に求められ、日本では倉橋惣三（1882-1955）に代表される思想である。これまでに、「子ども中心主義」を前提にする保育が「放任保育」と混同されたり（朝日新聞,1998）^(注2)、保育者のアイデンティティーを脅かす可能性が指摘されてきた（柴野,1989）。日本における保育は倉橋の理論が前提になっているが（無藤2009, p.19）、湯川（2015）が倉橋の戦後の論は「フレーベルの教育観に回帰するものであった。」（p.5）と述べるように倉橋はフレーベルに多大な影響を受けているといえる。このように、倉橋が影響を受けたフレーベルの思想は現在の教育

及び保育の礎になっているが、その思想を元実践されている保育によって何故、上述したような「放任保育」との混同や「主体性」を巡る保育者の葛藤（小倉2014）が引き起こされるのであろうか。

倉橋（1938）は、「かりに当時の哲学者たちの思想と、この書（人間教育）のそこここの章句とを表現の上で連結させてみたところで、それがフレーベルの心を知るのに大した役に立つとも思えない。」（p.233）と述べている。酒井（2011）は、「倉橋のフレーベル研究は、浅解な哲学理論を対象にするのではなく、自らの興味関心の角度から、または、時代の『新教育』の思潮に沿って、納得いくものに限っての『新釈』である。」（p.111）とする。そして、「その根底に神性啓培の哲学や『生命の合一』の思想、生命革新の理想があり、それを軽視してはフレーベル教育論は成り立たない。」（p.112）と批判的に捉えている。

フレーベルの思想は「万有在神論」と言われており、全ての存在には神が内在し生命を統一しているとされる。そ

の為、子どもの内にも生まれながらに神の存在を想定することがフレーベルの教育論の根幹となっている。このように生命に神の内存在を想定する思想は、18世紀当時の哲学思想から多大な影響を受けていると言われている。

たとえば、日本におけるフレーベル研究者の一人である長田新(1955)は『フレーベルに還れ』を著し、ドイツ哲学思想、特にロマン主義からフレーベルが多大な影響を受けたことを「フレーベルの著作を読むものは、誰しも恐らくカントから発展して来た獨逸ロマンティーク哲学、とくにシェリングやフィヒテやヘーゲルの思想が到るところに浸透しているのに驚かされるだろう。」(p.107)と指摘している。長田は、フレーベルはフィヒテの親友でその思想にも近かったとするが、「フレーベルは、一面シェリングの思想に心酔しつつ他面絶対を神的なものとするヘーゲルの思想を摂取した。主著『人間の教育』の中で彼はそうした立場を明らかにした。」(p.109)とし、「教育史上におけるフレーベルの功績は、あの深淵な哲学即ち第十八世紀の後半から第十九世紀の初頭にかけて発展した獨逸ロマンティークの思潮をなみなみと汲んで来て、人類教育の廣野に灌漑した点にある。」(p.107)と指摘している。このように、フレーベルが人間理性を絶対のものとみなした18世紀当時のドイツ哲学思想の枠組みの中で教育を考察し、児童に神性を見たものであることを指摘した。それ故に教師は児童を敬うべきであると説いた。

その後、荘司雅子などにフレーベル研究は引き継がれていくが、荘司(1975)は、「人間性の尊厳にして絶対的なものであることはカントに始まり、フィヒテやシェリングやヘーゲルらのドイツ・ロマンティークの哲学者によって等しく強調されている。フレーベルはこれら哲学者と同じ立場に立つ思想を確立した上に、さらにキリスト教の人間観に基づく彼固有の世界観を作り上げた。」(p.137)とする。荘司もまた人間理性を絶対のものとみなす当時の哲学思想の延長線上にフレーベルの教育思想が成立していることを指摘している。また、倉岡(1999)は、ドイツ観念論におけるシェリングとフレーベルの思想の理論的な関係について詳細に考察を行っており、「(略)古典派といわれるゲーテの自然哲学がシェリングと密接な関係を結んでいる線上にフレーベルの教育思想が展開しているのは興味深いこと

である。」(p.13)と述べている。

このように、日本における一連のフレーベル研究においてはフレーベルの教育思想が18世紀当時の西洋哲学思想の延長線上にあることが指摘されており、先に述べた酒井(2011)も、フレーベルの思想を理解するためには当時の哲学思想の理解が欠かせないと指摘している。長田(1955)、荘司(1975)らの記述からは、フレーベルの教育思想が影響を受けた18世紀当時のカント以降に展開するドイツ哲学思想が至高の思想であり普遍であると捉えていることが読み取れる。換言すれば、当時のドイツ哲学思想を崇高なものとして捉えることで、フレーベルの教育思想に意義が見出されていると言える。

ところで、西洋哲学思想は思想的な転換を繰り返しながら現在に至っている。例えば、上述したようにフレーベルへの影響を指摘されるシェリング(F.W.J.Shelling,1775-1854)の哲学は、その思想的転換から前期と後期とに分けられている。倉岡(1999)は、これに関し、対立する「精神」と「自然」の両契機の「同一性」を説く前期から、「『善』と『悪』の対立観が主題となる」後期への転換を指摘し、後期シェリングにおいては、論点の核心は「同一性」から「神の内なる自由」へ転換すると述べている。(p.186)即ち、「『神』の中にも『悪』をなしうる力」=「悪をもなしうる自由」があるという後期思想の論点と「従来最高善と考えられた『神』の概念」との矛盾を解決すべく導入された概念がこの「神の内なる自然」である。これは神がそこから立ち現れてくる根源的なもの、神の根拠となるものであり、「『自由』の可能性の根拠」である。それゆえ、そこは「『善でも悪でもない』可能界」であり、悪も「善の欠如態」としてではなく対等なものとして「善悪の対立抗争」に対置されるものとされる。

倉岡は他方でフレーベルにおいては、後期シェリングに見られるような善と悪をめぐる「神」の問題に関わる思想的転換は見られないとして、シェリング前期思想との連関においてフレーベルの教育思想を繙いている。実際、倉岡が述べるように、こうした転換はフレーベルにおいては見られず、フレーベルは前期シェリングを中心としたドイツの哲学思想の影響を受け、教育思想を打ち立てたと考えられる。

では、後期シェリングが見出した自身の前期思想、即ちドイツ哲学思想の限界、及びそこから転換に関連して、どのようにフレーベルを読み取れば良いのだろうか。

再度繰り返すが前期シェリング思想は、全ての存在が神の内在によって統一された生命であり、人間理性はこの生命的存在を完全に認識し且つ自ら現実世界に実現する絶対的なものであるとする、カントからヘーゲルへ連なるドイツ哲学思想の系譜に位置づけられるものである。他方で後期の思想においては、ヘーゲルに完成を見る理性主義を批判し、現実非合理性を見出しその根拠を問う立場へと思想的転換が図られる。換言すれば、シェリングは「理性によっては理解することも根拠づけることもできない非合理的な悪や悲惨事存在」が現存する事実に対して、(木田,1998)「同一性」の立場に立つ自身の前期思想、及び近代理性主義を完成したヘーゲルの思想の限界を見出し思想の転換を図ったのである。

このドイツ哲学思想の限界に関して、倉岡は上述の通り一方で「神の内なる自然」の概念において悪の積極的意味を認めている。しかし他方で、「シェリングは『神』が絶対の『愛』として自己実現を行っているという視座に立つ」(1999,p.187)ので、彼の後期思想は「『神』が『愛』のうちに『悪』を包み込みながら」「『善』から切り取って非存在に放逐するという世界の創造観へと展開し、「神秘主義に近づく非合理主義の立場に立つ」とする。即ち、前期から後期へのシェリング哲学の転換について、精神と自然の「同一性」及び近代理性主義の立場から「非合理的な神秘主義」への移行と捉えられている。しかし、こうした捉え方は、シェリングによる自身の前期思想、即ちドイツ哲学思想の限界の自覚、及び後期への転換の企図という観点からシェリング後期思想の意味を見出しているとは、必ずしも言えなくなるのではないだろうか。

倉岡は(1999,P187-192)シェリングがその臨界点を見出したドイツ哲学思想と思想的基盤を同じくするフレーベルの神的統一の思想については、一方で「フレーベルにはそのような(=シェリングのような※筆写注)転換は見られない」(1999,p.188)としながらも、他方でシェリングとフレーベルの間には「相違点も少なくないが、かなり似通った面がみられる」(1999,p.187)という見方を示している。後者の「似

通った面」とは、両者が共に「『個』と『全体』との関係のあり方」において、「善」と「悪」の「関係の矛盾の問題に挑ん」(1999,p.191)でいたということである。しかし、シェリングが「善」と「悪」の問題に、取り分け「悪」の問題に取り組むに際し、思想の根本的転換が必要であったことは上述したとおりであり、「フレーベルにそのような転換はみられない」。そうであれば、寧ろ、「少なくない相違点」、つまり両者における自身の思想的基盤の限界の自覚と、そこから転換の有無にこそ焦点があてられるべきではないだろうか。

倉岡は「フレーベルは自己の『自然哲学』に基づいて『必然性が、自由を』、『外的憎悪が、内心の愛を』喚起すること、つまり『悪』を『善』へと再逆転することこそ神からの教訓であると考えている。」と述べ、「彼(フレーベル)自身のロゴスは宇宙観を土台として見事にシェリングを中心にした当時の思想を彼なりにまとめているといえるのではないだろうか。」(1999,p.192)とする。つまり、倉岡(1999)の論では、前期シェリングを中心とした人間理性を絶対とみなすドイツ哲学思想にフレーベルの思想は影響を受けているが、臨界点からの転換に関しては影響を受けておらず独自の解釈で乗り越えたとする。その独自の解釈とは、「『悪』は『愛』によって『善』へと転換しうる」(p.191)というものであり、論理ではなく感情によってヘーゲルの理論の限界を乗り越えようとしたというものである。ここに、フレーベル思想の時代的制約が見出されるといえるのではないだろうか。

(2) ボルノー (O. F. Bollnow, 1903-1991) の考察

フレーベル思想がシェリングの前期思想に依拠していることは、既にボルノー(1972)によっても指摘されている。ボルノー(1972)は『フレーベルの教育学』日本語版への序文(P.3-8)で、フレーベルの思想について「意味深長な理念の背景の全体」を知り、その上で「根本的に変化した今日の世界においてもなおどの程度有効でありえるかを問う」必要性を訴える。その思想が「ただ皮相な形でしか作用」しておらず、その「意図した理念」が知られていないからという。「理念の背景の全体」とは、彼の個々の思想が根付く「形而上学的背景」であり、具

体的には観念論的な「世界の調和的な秩序」であると説明される。また、ボルノー（1972）はフレーベルをロマン主義の教育思想家と位置付け、『フレーベルの教育学』の課題を「文学、…哲学その他と並んで、また固有の教育学をも包含する統一的なロマン主義運動が現に存在すること、そしてただこの点からのみ、フレーベルの思想界への適切な接近が可能であることを示すこと」（p.24）とする。また、「ロマン主義から『浄化』されたフレーベルを取り出して、時代に無関係に妥当する核心を得ることなどは不可能である。むしろ彼の教説はその細部に到るまで、このロマン主義の諸前提からのみ理解し得るものである。」（p.46）と述べる。つまり、「統一的なロマン主義運動」^(註3)において捉えられる世界観こそが、フレーベル理解を皮相なものに終わらせないために理解すべき理念の背景ということであり、フレーベル思想の射程を捉えるためには、思想的基盤であるロマン主義思想の持つ歴史的必然性、及びその時代的限界に対する自覚が欠かせないということになる。

ところで、ボルノー（1972）は、このようにフレーベルの思想の理解にはロマン主義哲学の理解が欠かせないことを指摘しているが、シェリングの思想の転換の過程に踏み込みながら哲学思想史に位置付けてフレーベル思想を解釈することはしていない。

本稿では次節以降でこの点に照準して論じることをしたい。

（3）目的と論の展開

本稿では、まず、①フレーベルの思想を同時代のドイツ哲学思想（特にシェリングの前期思想）との関連において繙き、②その思想の核心である「生命」の意味するところについて考察する。そして、フレーベルのいう「生命」とシェリングのいう「自然」に思想的な同一性が見出せるのかを検証する。その上で、③シェリング自身が見出した前期思想の思想的限界を探究し、後期思想への転換とはどのようなことなのかを検証していく。前期思想から後期思想への転換を果たしたシェリングの思想の過程を考察することで、フレーベル思想の時代的制約を探りたい。

ボルノー（1972）がフレーベルの教育思想の系譜として位置づけているロマン主義は、「時代的には大まかに言って（ボルノー 1972,p.22）」18世紀と19世紀の境をまたいだ約20年間に、ドイツにおいて展開した思想運動である。ボルノー（1972）は、シェリング、ノヴァリスというロマン主義の哲学、文学を代表する思想家について触れながら、ロマン主義の一般的な特徴づけを行っている。本稿では中でも「一般的なロマン主義の世界像が哲学上の概念性を刻印されている」（ボルノー 1972,p.32）シェリングの思想を、思想的背景として検討する。

ボルノー（1972）も述べるようにフレーベルとシェリングの思想には構造的同一性、あるいは類似性が見られるが、これらの思想がドイツに展開された「ロマン主義」として同一構造を持つという思想的意義を明らかにするためには、その思想を西洋思想史に位置付けて読む必要があるだろう。哲学史や思想史の中に位置付けて読むことで、ロマン主義に関するボルノー（1972）の説明を理解することも可能になると考える。その為、本稿では、シェリングの思想を検討するにあたり18世紀当時のカント、ヘーゲルの思想を読み解きながら、そこにシェリングの思想を位置付けていくという手法をとる。その際、木田（1991,1995,1998）及び村岡（2012）の論を参考に解釈していく。

2. フレーベルの思想的背景

（1）フレーベルの教育方法の原理

フレーベル（1964）の主著『人間の教育』、第一篇^(註4)「全体の基礎づけ」に、「教育方法の原理」（7節-14節）がある。7節において、「教育、教授、および教訓は、根源的に、また、その第一の根本特徴において、必然的に受動的、追隨的（防衛的、保護的）であるべきで、決して命令的、規定的、干渉的であってはならない（p.18）」と述べられている。これは、教育的態度を「追隨的」と「干渉的」、即ち「放任」と「指導」とに分けたうえで、前者の態度を優位に立つとするものである（ボルノー,1972）。

人間は、たとえ幼児であっても、「それ自体として最

善のものを意志」し、自分の「素質や能力や手段がそれ(=最善のもの※筆者注)を表現するのにふさわしいことを自分で感じている形式で、それを意志する(8節)」(p18)ものであるからである。これは、若い動植物が、それぞれの個体の内に働く法則に従いながら、それ自身で最善のもの、即ち「美しく発育し、立派に成長する」ことを自然に目指すのと同じことである。換言すれば、それ自体で最善のものを意志する人間に干渉的な態度で接することは、無理な干渉により、却って動植物の「純粋な発育と健全な成長が妨げられる」と同様のことになるからである^(註5)。

上述したように「追隨的」態度に「防衛的、保護的」と言う語が捕捉されているが、この意味するところは、未熟な子どもの“自発的成長”を「保護的」に〈見守る〉大人に、優位性(注：傍点筆者)を認めるものでは決してない。例えば、40節、41節(p.108-116)では、周辺環境に好奇心を抱くようになった幼児が、あらゆることを知ろうとして母親や父親に質問する場合、父母はどんな態度でそれに答えるべきか、ということが説かれている。フレーベルは、父母による、こうした「子どもたちの指導」を「子どもたちと共に生きる」と言い換えた上で、ここから得られる「喜びや楽しみ」以上のものはないとしている。即ち「追隨的」態度による教育とは、立場の優劣を前提にした上での「保護的」な導きなのではなく、教育に携わる者(親)と、教育を受ける者(子)とが、〈共に何かを得る過程〉と考えなくてはならないだろう。

では、この〈共に得られるもの〉とは何であろうか。フレーベルは子どもの質問に対しては、必要以上に多くを答えすぎず、子どもが「自力で見出し」、「よく考える」(40節p.108-116)ように導くことが、教育にとって最も大切なことであるとする。続く41節では、この根拠に関する捕捉が述べられる。その冒頭で「われわれ大人は死んでいる」(41節 p.117)と述べられているが、ここで「死んでいる」と比喻されているのは、「本と同じような」、「事実直観を欠いた」一群の知識である。有体に言えば、頭でっかちで無味乾燥な<机上の知識>となるであろう。様々な体験を通し好奇心を呼び覚まされながら獲得した<生き生きとした実感を伴う知識>と対比されるものが、

「死んでいる」知識と考えて、イメージとしては大きくは異ならないだろう。

問題は、<共に得られる>べき、「事実直観」を伴う(注、傍点筆者)知識が何であり、なぜこれが重要なのかを、フレーベルがどのような根拠によって説明するかを理解することである。

フレーベル(1964)は、41節、42節(p.117-119)において、好奇心をもって周辺環境に向かっていく子どもの態度や言葉を、「生命を生ぜしめる」、「生命を吹き込む」という言葉で言い換えている。上述のようにフレーベルは、子どもの自発的成長を「最善を志向」する動植物の成長の比喻で捉えていた。同様にここで言う「生命」も、単なる経験の“生々しさ”や実感の強さを言うものではなく、一定の保護が与えられれば、「最善のもの」に成長していく、子ども一人一人の個体内面に働く「法則」と考えられるだろう。

このように生物的な生命の成長との比喻で捉えられる「生命」、換言すれば、人間の内面を「最善のもの」に成長させる「法則」を想定することこそが、フレーベルの教育思想の根幹であると考えられる。

(2) フレーベルの理念

『人間の教育』1節から6節(1964,pp11-17)は、邦訳書(岩波文庫版)では「教育の哲学的基礎」という題でまとめられ、『人間の教育』全体を支えるべき理念が述べられる。これらの節の記述を基に、当面の課題である「生命」の内容を考察したい。本書冒頭で、フレーベルの理念は以下のように述べられる。

「すべてのものの中に、永遠の法則が、宿り、働き、且つ支配している。この法則は、外なるもの、即ち自然のなかにも、内なるもの、即ち、精神のなかにも、自然と精神を統一するもの、即ち、生命の中にも、つねに同様に明瞭に、かつ判明に現れてきたし、また現に現れている。少なくとも、この法則がこれ以外の仕方では存在することができないという必然性を、心情や信仰から固く信じ込み、それに貫かれ、それに勇気づけられているような人か、それとも、清澄な精神の眼によって、内なる

ものの本質から生じてくるものであることを洞察するような人にとっては、このことは常に明白な事実であったし、現にまたそうなのである。この全てのものを支配する法則の根底に、全てのものを動かし、それ自身において明白である、生きた、自己自身を知るそれゆえ、永遠に存在する統一者が、必然的に存在している。この…統一者そのものもまた、…同様に生き生きと…認識される。…この統一者が神である。」(p.11-12)

ボルノー (1972) が「この文章の中にフレーベルの世界観と人生観が語りつくされ」、「後のものすべては、根本的にこの一つの文章の漸次的展開に他ならず」(P48-49)と述べるように、『人間の教育』の記述全てを理解するための前提がここに含まれている。

引用の内容を整理すると以下のようになる。即ち、我々が生きる世界で生じる現象には、差し当たり、外界である「自然」の現象と内界である「精神」の現象との二つの現象がある。しかしこの二つは決して別個に並立して存立するものではなく、内外両界を統一する「永遠法則」、即ち「生命」の現象の二側面にすぎない。従って、「この一なる永遠の法則」は、「冷静な心眼で」外界に内面的世界を直観する人間、つまり内面的世界の本質から「外界が必然性をもって生じているということ」を洞察できる人間に対し「姿を現す」ということであろう。この「法則」が神の名で呼ばれている。

従って、「神」という言葉の理解の仕方に留意する必要がある。一般的な信仰の対象である神としてだけ、このフレーベルの語法を理解すると、フレーベル思想の全体を読み誤ることになる。内外界を統一する「法則」という語と等しく用いられていることから、この「神」が所謂信仰の対象としての神ではないと理解することができる。

例えば、信仰と対置されることが多い科学的思考について考えて見る。合理性を重視する科学的な立場は、信仰を不合理なものとして廃し、合理性に依拠して自身の正当性を主張する。現代では、自覚的であれ無自覚的であれ、多くの人がこうした立場によることが多いのではないか。しかし、この科学的認識の合理性とは何か述

べようとする、フレーベルの言う「神」と大きく変わらないものになってくる。即ち、科学的法則という、抽象的=理論的な内面的世界の本質と、その法則に従う外界の自然の運動とが一致するという想定がなされる点では、フレーベルのいう「神=法則」の存在の想定と発想の方向は変わらないと言える。科学的法則は自然現象にのみ当てはまり、フレーベルが述べる「法則」という語とは位相が異なると考えることもできる。ここでは、差し当たり、フレーベルの語法としての「神」について、一般的信仰の対象以上のものとして取らえるべき概念であるという点を喚起したい。

以下では、この「生命」概念について、ロマン主義思想の中に位置づけながら検討していく。

(3) ロマン主義思想とフレーベル①

～シェリングの哲学の思想構造～

ボルノー (1972) は、「生命」を核とするフレーベルの「広範な思想への刺激」となったシェリング哲学の一般的特徴について、「フレーベルの思考過程の理解にとって必要である限りの範囲」(P32)においてと限定しながら、次のようにまとめている。

シェリング哲学の特徴は、弁証法的な自己発展という考えを「自然それ自体へ移して、自然そのものを、活動的な、つまり内的必然性をもって発展する主体として把握」(ボルノー 1972,p33)するということ「転回」を行なうことにある。この「転回」とは、シェリング以前の哲学、直接的にはフィヒテが展開した「精神の弁証法的な自己発展」(ボルノー 1972,p33)という思想、主体的な運動をする原理を人間精神に限る思想からの転回ということである。換言するなら、「最も内なる本質において人間の精神に類似した精神的原理としての自然」(ボルノー 1972,p33)、人間精神をも含んだ自然を「大きな課題」とする「転回」を行ったのが「シェリングの『同一哲学』」だということである。この<人間精神を含む自然>は、フレーベルの言う「統一的な生命」を哲学的概念として探求したものと見做すことができるだろう。

このシェリングの『同一哲学』を理解するために、以下では、哲学史におけるシェリング哲学の位置づけを簡

略ながら振り返る。

(4) ロマン主義思想とフレーベル②

～西洋哲学史におけるシェリングの位置付け～

西洋哲学史上においては、シェリングはカントの後にフィヒテ、シェリング、ヘーゲルへと展開された〈ドイツ観念論〉の系譜のうちに位置づけられる哲学者である。ドイツ観念論は、カントの二元論の一元化を目指したものとして一般に知られている。

カントの二元論とは、人間の理性が確実に認識できる領域と、それが及ばない領域を截然と分け、人間の認識能力の射程を定め、人間の確実な認識が成立する範囲を限定するものである。カントは人間理性に有限性を認め、人間の認識能力の限界を、自然科学的な〈現象界〉を認識する範囲に設定するが、この範囲設定により直ちに、その範囲外に人間の認識が及ばない〈物自体界〉の存在が設定されるのである。

カントによれば、人間の自由や、道徳的価値判断が成り立つのは、この〈物自体界〉においてこそである。現象界においては全てが因果法則に支配されている以上、どのような行為であれ、全ては機械的に生じるものとなり自由な選択などはありえない。対して物自体界は、有限な人間の認識の対象とならず現象界のような自然科学的な〈因果法則〉は及ばない。従って、行為の選択に関しその道徳的善悪が問われる世界は、現象界を超えた物自体界に設定されなければならなくなる。例えば、ある保育場面で考えて見れば、「友達のおもちゃを欲しい」とA児が欲したとする。この場合、カントが想定した因果法則が支配する「現象界」においては、A児は友達のおもちゃを意のままに取り上げることになる。しかし、因果法則が及ばない「物自体界」においては、「友達の持っているおもちゃをとってはいけない」という道徳律が成立するということになる。

しかし、ここには一つの難問が残されることになる。カントにおいては一方で人間の認識の確実性は担保されるのに対し、他方で物自体界は人間に認識不可能な領域に留まる。そうであれば、〈物自体界〉で成立する道徳的实践や、人間の自由が、歴史的世界、即ち〈現象界〉

に属する世界においてどのように実現されるのか、或はそもそも実現できるのかという問題も不可知のままに留まることになるからである。

この、カントにより限界を課された人間理性を、絶対性を備えた〈絶対精神〉へ高めていくこと、換言すれば、因果法則から離れた自由な道徳的行為を、現象界、物自体界の区別のない一元的な世界のうち実現するものへ、フレーベルの表現で言えば「最善のもの」を認識できるものへと高めていくのがドイツ観念論の展開である。

このドイツ観念論哲学の社会的背景としては、フランス革命の影響が多く指摘されている（ローゼンクライツら 1983）。つまり、「ドイツ観念論の哲学とは、フランス革命の進行に微妙に対応しながら展開されたドイツの思想運動」であり、そうであれば「関心は科学的認識による自然支配から理想社会の実現へ、つまり、認識から実践へと移っていく。カントの二元論の一元化も、認識主観を実践の主体へと吸収していく方向で行われることになるのである。」（木田 1998,p.316）

このように人間理性が、認識主観として自然と向き合うものから理想社会の実現を目指す実践の主体へと変質するのに対応して、対象である世界の方も「単に静態的な自然界としてではなく、生成する歴史的世界として捉えられる。」（木田 1998,p.319）ことになる。認識主観から実践主体へという変化は、人間理性の世界への関わり方自体の変化であるが、働きかける人間理性の変化に応じて世界のあり方も変化するのである。

ドイツ観念論の完成者と目されるヘーゲル（G.W. F. Hegel 1770-1831）によれば、理性^(註6)が理性であるためには、自分自身を自覚することが必要である。認識主観としての理性であれば、「自然科学の法則」という形で、対象世界において自身を自覚する。同様に実践の主体である理性であれば、対象世界において自身の自由を自覚するのだからなければならないが、この自覚が成り立つのは、歴史的世界に人間の自由が実現されるということに他ならない。

この理性の実践主体への変化、並びに対象たる世界の、生成する歴史的世界への変化はヘーゲルが用いる「労働」（ヘーゲル 1807,p.135-136）という概念によく現れてい

る。「労働」は対象世界に手を加え、変形させる行為である。農民であれば、「耕作」という「労働」を通して対象世界たる大地に手を加え、田畑に変形させる。即ち、田園風景は、決して自然の風景ではなく、人間の形式、理性が刻印されたものである。人間の理性は『労働』によって自らが生み出したもののうちに自らが対象化されているのを経験し、言わば自らを直感することができる。」(村岡 2012,p.175)

ところで、このような対象世界の変形は、対象世界のみならず、実践主体自体の変化でもある。手つかずのありのままの大地は人間にとってどこまでもよそよそしく存在するものである。これを豊かな田畑に変えるには、地質や植生、気象条件について広い知識を獲得することが必要であり、また粘り強く開墾を続けるための強い意志も備えていく必要がある(木田 1998,p.343)。従って、労働は、主体が対象を変形するものであると同時に、対象もまた主体に働きかけ変化=成長させるものである。

このように、理性の自覚とは「労働を通じての自己実現」であるが、「そのように自己を実現したとき、この労働の主体は、(中略)労働の成果である対象のうちに自分の分身を認め、(中略)自由を味わうことができるのである。」(木田 1998,p.344) 歴史的世界とは、労働を通じ対象に働きかけ、理性自身も成長しながら、対象世界によそよそしさが消え、理性自身が実現されていくこの過程をいうのであり、弁証法運動とは、理性のこうした発展をいうものである。

先に述べたように、シェリングも、カントが残した難題を解決すべく展開したドイツ観念論の系譜に連なる哲学者であり、その思想は通例では、ヘーゲルがドイツ観念論を完成する過程で批判的に乗り越えられたとされている。シェリング哲学の主題は上述したように「自然」であったが、ドイツ観念論の系譜に位置づけられドイツロマン主義運動に連なるものと見做される思想である以上、シェリングの「自然」が自然科学的な生態学的自然でなく生成する世界であることは自明であろう。「自然」とは、理想、即ち「最善のもの」へと生成、発展していく「生命活動」、「生きた自然」(村岡 2012,p.97)に他な

らない。

前節で述べたように、シェリングはドイツ観念論思想運動において、生成・発展する主体を人間から「自然」へと展開させたとみなされている。この「転回」を筆者なりに転回するならば以下のものであろう。シェリング以前のフィヒテの思想においては、自然は飽くまでも人間精神に対置され、人間精神が自己発展の運動をする過程において克服されるべき対象として措定されるものであった。しかし、既にヘーゲルの思想で確認したように、歴史的世界における理性の運動は、自然、即ち対象世界が単に理性により変形させるだけではなく、対象による理性への働きかけも、欠かすことのできない運動の重要な契機であった。従ってシェリングは、人間理性の生成・発展運動において、対象世界、即ち自然の持つ意味を再度取り上げたということになるが、単にそれだけではない。人間は「自分を自らの外部に対象化し、そして対象化されたものによって自分を規定するような運動の成果」であり、自己の対象化を通して自己規定するという「活動によってはじめて人間になる」(村岡 2012,p.97)のである以上、対象世界へと働きかける運動自体の主体は人間の活動ではない、ことになるからである。即ち、この活動は「無意識的活動」であり、この「人間を生み出すような無意識的な生産力」が「生命活動」、「生きた自然」と言われるものなのである。シェリングは、この「生命」、「自然の運動の最終成果」、即ち、この運動が目指す「最善のもの」を人間の自己意識を生み出すことと見做している。「最善のもの」を目指す活動がどれほど法則に従ったものであれ、生命の運動自体は無意識的に進行するに過ぎない。従って人間の自己意識を生み出し、「最善のもの」の実現を認識できたときに初めて自由な運動が完結するということである。

ところで、「生きた自然」の「無意識的活動」の最終成果として人間精神が生み出されるのであれば、「生命活動」、「生きた自然」と人間の精神とは、相互に対立する二項では決してなく、「同一性」を原理の下に統一されるべきものとなる。この同一性を示すことこそが、シェリングの前期思想、即ち「自然哲学」の課題なのである。(註7)

こうした、実践的主体の生成・発展を通じた歴史的世

界の形成、即ち、人間理性の運動による最善のものの実現という世界観こそが、フレーベルの思想的背景として理解されなければならないものだろう。

(5) 後期シェリングへ

しかし、こうした世界観が現代の我々に容易に受け入れられないのは明白である。ドイツ観念論の思想家達を「理性による自由の実現」として熱狂させたフランス革命の帰結から分かるように、この革命は「期待されたような『自由』と『平等』にもとづく階級なき人類の理想社会が実現されるどころか、この革命は実は、以前にも増して極端な社会的不平等を生み出し、人間を非人間化しつつあった資本主義経済体制の担い手であるブルジョワジーが政治的主導権を奪取する機会に過ぎなかったということが明らかになった（木田 1995,p.169）からである。ヘーゲルにおいて歴史や社会を合理的に形成していくものに高まった人間理性、実践的主体と歴史的世界を統一する〈絶対精神〉は、ヘーゲルの死後に活躍したマルクスやキルケゴールという哲学者によって批判の対象となっていく。「実存主義」哲学の源流と見做されるキルケゴールにおいては、理性によって統一された世界に存在する不合理な現実存在、自分という人間の「実存」こそが問題であった。マルクスにおいては、資本主義社会において疎外される現実の人間労働が問題となる。この社会では、労働を通じて人間理性が自由を実現するどころか、逆に貧困と非人間化が進み、商品社会の論理に縛られ労働に従属させられる。この疎外された現実存在に人間の本質を回復することが思索の課題となった。即ちドイツ観念論以後の思想は、人間理性と世界の統一という、あまりに抽象的な理性主観に対して具体的な人間存在を回復する試みなのである（木田 1991,p.38）。「生命的統一」であれ、〈絶対精神〉であれ、そこで捉えられる人間像は抽象的な主体に過ぎず、具体的な場面での個々の人間の自然的・感性的側面に向き合っていないからである。

『フレーベルの教育学』の結びにおいてボルノー（1972,p.208-211）も、端的にフレーベル思想の「現代への直接的移行の可能性は、」「他のいかなる偉大な教育学

者におけるよりも困難だ」と述べている。フレーベル思想が「ロマン主義と後期ドイツ観念論へ時代精神に深く根づいている」ことは、フレーベル思想の「全てのものを初めて可能にする彼の思惟の源泉根拠」だからである。従って、「フレーベルを全体として無批判に受け入れるべきではない」が、彼の思想との対決においては「彼を全体として把握して、全体として彼に対して態度を決める」、即ち「総じてロマン主義一般との対決」でなければならない。

ほかならぬシェリング自身が、ヘーゲルの死後に自身の以前の思想からの転回を図っている。これは哲学史上においては、〈消極哲学〉から〈積極哲学〉への転換といわれるものである。前期の〈消極哲学〉においては、あらゆるものは理性の抽象性に解消されてしまう。そこに理想的なもの以外が存在する余地はない。しかし、上述したように現実の世界には理想的なものだけが存在する訳はなく、不合理な存在・できごととも否応なく存在する。そうした「事実存在」に向き合おうというのが後期の〈積極哲学〉である。シェリングはこうした不合理なものをも生じさせるものを「根源的存在」と呼ぶが、これは、前期の「最善もの」を目指す「生きた生命」とは全く異なっている。「根源的存在」は、理性という光を生み出しながらも、同時にそこから不合理な「事実存在」をも生じさせる自身の姿を、光たる理性に照らし出させる「生命衝動」である。後期シェリングはこうした衝動的な「生命」を「人間的自由」としている。こうした不合理な存在、即ち「悪の存在可能性が問題とされる」のは、「神の真の意味での自己展開が可能」とされるからである（村岡 2012,p.137-138）。つまり、神的存在が自らと隔絶した「外部」に向き合うことで〈神的統一〉を目指す運動が可能になるということであろう。最早、透徹な理想的な存在としての人間は想定できないということであり、事実として不合理なものでもありうる人間に向き合うことで「最善のものを意志する」運動が始まるのである。そうであれば、前期シェリング的な世界観を前提にしたフレーベルの思想理解にも、不合理でも十分にあり得る人間存在という理解を前提にした解釈が求められることになるのではないかと。

3. まとめと今後の課題

本稿では、まずフレーベルの教育方法の原理として「追隨的」態度による教育を挙げ、教育に携わる者〈親〉と教育を受ける者〈子〉とが〈共に何かを得る過程〉と捉えた。そして、この〈共に得られるもの〉とは「事実直観」を伴う知識であるとした。この「事実直観」を伴う知識が生じる前提には、人間の内面を「最善のもの」に成長させる「法則」が想定されており、これが「生命」であると考えられる。

この「生命」という法則は「神」の名で呼ばれているが、ここでいう「神」とは一般的な信仰の対象としての「神」ではなく、外界である「自然」の現象と内界である「精神」の二つの現象を統一する「永遠の法則」としての「神」である。

この「生命」であり「神」である「永遠の法則」を読み解く為には、本稿ではシュリング哲学の思想構造を参考にし、西洋思想史に位置付けながら検討した。シュリングは、カント以前の哲学を踏まえ人間精神をも含んだ自然を「大きな課題」とする「転回」を行った。カント以前に遡ると、カントは二元論によって人間の理性が確実に認識できる領域〈現象界〉と、それが及ばない領域〈物自体界〉を截然と分け、人間理性に有限性を認めていた。しかし、〈物自体界〉で成立する道徳的実践や、人間の自由が〈現象界〉において果たして実現できるのか、またどのように実現できるのかという課題が残された。そこで、シュリングを始めとしたドイツ観念論では、因果法則から離れた自由な道徳的行為を、現象界、物自体界の区別のない一元的な世界のうちに実現するものへと高めたのである。この一元的な世界が、フレーベルのいう「最善のもの」を認識できる「生命」であり「神」である「永遠の法則」の前提であるということが明らかになった。

さらに、ヘーゲルが完成させたドイツ観念論に照らして考えると、フレーベルの示す人間の内面を「最善のもの」に成長させる「法則」つまり「生命」は、対象に働きかけその対象からの働きかけをも受けながら人間自身も成長していく過程であり、「最善のもの」を実現できたときに初めて「生命」の自由な運動が完結すると捉えられる。このような、人間理性の運動による最善のもの

の実現という世界観がフレーベルの思想的背景であることが明らかになった。

しかし、こうした人間理性、実践的主体と歴史的世界を統一する〈絶対精神〉は既にヘーゲルの死後に活躍したマルクスやキルケゴールという哲学者によって批判の対象になっている。「生命的統一」であれ〈絶対精神〉であれ、そこで捉えられる人間像は抽象的な主体に過ぎず、具体的な場面での個々の人間の自然的、感性的側面に向き合っていないからである。それ故に、シュリング自身がヘーゲルの死後に自身の前期思想からの転換を図っている。現実の世界には理想的なものだけが存在する訳はなく、不合理な存在・できごとにも否応なく存在する。シュリングはこうした不合理なものをも生じさせるものを「根源的な存在」と呼んでいる。この「根源的な存在」はフレーベルの示す「最善のものを意志する」存在とは全く異なっていると言えるであろう。つまり、子どもはフレーベルが示したような「ア・プリオリに理想社会の実現を目指す実践の主体」であるとはいえ、不合理でもあり得る存在であるということになる。シュリングは自身の前期思想について限界を自覚し思想的転換を図ったが、フレーベルには前期シュリング思想に依拠している自身の思想の限界への自覚は見られない。ここに、フレーベル思想の時代的制約を読み取ることができる。

ある思想の成立とその思想が生み出された時代・社会の関係について、大澤（2011）は次のように述べている。古代哲学の思想に見られる「アクラシアAkrasia」という概念「わかっているけれど、ついやってしまったという状態」（p.123）は現代では容易に理解できるが、古代哲学者のアリストテレスは証明できなかった。その理由としては、「それぞれが内蔵している社会システム」（p.142）の違いが挙げられる。つまり、古代ギリシアにおける社会においては、現代資本主義社会では当然あり得る「快を階層化する構造」（p.123）がなくアリストテレスには証明が困難であった。こうした比較社会的見地に立つと、依拠している社会システムの中で人は思考しており、その時代の思考様式をそのまま社会システムが異なる社会に適用することは困難であるということが理解できる。また、仲正（2006）は、丸山眞男が「日本

の思想」において「①日本には西欧の『インテレクチュアル・ヒストリー』の伝統がなく、日本人は自分たちの思想がこれまで辿ってきた変遷の過程を体系的・歴史的に再構成するのが苦手であること、②そのため、西欧の思想を輸入するにあたって、その思想が形成された歴史的な文脈を無視して、自分に理解しやすいところだけ、つまみ食い的に取り入れる傾向があったこと」を指摘したとする (p.51)。ボルノー (1952) が指摘しているように、フレーベルの思想はその背景である西洋哲学思想史の中に位置付け、歴史的なコンテキストを踏まえて解釈する必要がある。大澤、丸山の論からも、当時の社会システムや思想的文脈を踏まえた上でのフレーベルの再解釈を行う必要があると考えられる。

では、現代的な文脈においてフレーベルの教育思想は有効な理論とはなり得ないのだろうか。矢野(2014)は、バタイユの理論を援用して子どもの遊びを「溶解体験」として理論化し、フレーベル思想における「生命の合一」を「溶解体験」になぞらえて再解釈している。また、実証主義的アプローチによりフレーベルの示した遊戯の方法それ自体に価値を見出すハイランドらの研究も示されている (青木 2008)。こうした試みに加え、本稿ではボルノーの示唆から以下のように提議したい。

ボルノー (1972, pp.212-214) は、既に述べたようにフレーベルの思想の現代への直接的な移行は困難であると示した上で、フレーベルの思想から今日向き合える態度として以下のように示唆している。

「一.世界それ自体が、自ら有意義な関連ではないとしても、人間の課題は、彼自らがそうした秩序を形成することにある。してみれば、生の合一はやはり、教育の有意義な目標である。生の合一とは、家庭から社会の最高形式に到るまで和合を回復させることであり、すべての分裂と破壊的な敵意とを、意義深く形成された文化というより大きな全体の中で克服することである。(略)

二. (略) 人類および個人の発達、こうした魔術的な意識の状態^(注5)を経過するということである。こうした状態にあっては、人間は一体の意識において生きていて、万物を包括する一つの偉大な世界法則の意味、つまり万

物の内的、合法的和合によって深く貫かれているのである。(略)

三. (略) ここで生ずる課題は、人間の努力によって、カオス状態から秩序を手に入れることであり、さらには、もつとずっと深い課題として、すべての幻滅にかかわらず、より高次の地平において、存在への感謝をこめた信頼と、存在のなかで庇護されているという感情とを回復させることが問題である。」

ここで示唆された課題を、どのように読み解けば良いのであろうか。ボルノーが示唆しているのは、第一には「彼自らが秩序を形成することにある」とあるように、不合理でもあり得る人間存在にいかに向き合い「合法的和合」に向けて秩序を形成するかということであろう。^(注6)

第二にはそうして形成された秩序を基に、具体的な個々の子どもが「存在への感謝をこめた信頼と、存在のなかで庇護されている感情」とをいかにして回復していけば良いのかを改めて検証していくことであると言えるのではない。

上記二点を現代的なコンテキストの中で再構築していくことを今後の課題としたい。

<注>

(注1) 無藤 (2009)は「幼稚園教育要領が平成元年度に非常に大きく改訂され、このときに『倉橋の精神に戻れ』みたいなことで、子ども中心主義を改めて強く押し出したわけです。p.19」と述べている。

(注2) 「朝日新聞」では1998年6月10日～12日朝刊で「自己チュー児」という連載がなされている。

(注3) 『教育学』原書ではロマン主義教育思想の系譜として、アルント、ジャン・パウ、フィヒテ、ヤーンと連なる系譜の最後にボルノーが位置づけられている。

(注4) 篇、章などの区分は邦訳(岩波書店版)の訳者によるもの。原著では各節に1から番号が付されているのみである。

(注5) フレーベルは、命令的・干渉的教育についても完全に排除する訳ではない (9節)。飽くまで相対的な位置づけとして追隨的態度を優位に置くということである。「明白な生

きた思想、即ち、それ自身に基礎を持っている真の理念 p.70) (フレーベル) について、例えば、数学などの教育においては、干渉的な教育が行われたとしても、それは人間に対する外的強制ではなく、人間の主体性を支配する「永遠の法則」に対応することである。

(注6) 尚、ヘーゲル哲学において、ここで言う意味での理性は「精神」と表現される。本稿は厳密な哲学的語義を問題にしない以上、語義的な厳密性は度外視して語の一貫性を持たせ「理性」と表現する。

(注7) シェリングは、「私自身が自然と同一であるかぎり、私が私自身の生命を理解するのと同じくらいに、生ける自然が何であるか、私は分かっている。いかにして自然のこうした普遍的生命がこのうえなく多種多様な形態をとって段階的な発展をとげ、次第に自由に近づいていきつつ自己を開示することが私には分かっている。… (中略) …『自由な運動』があるところのみ『生命』は見出されると常識は考えている」(シェリング 1797 p59) と述べて、自然の無意識的な運動、即ち「自由な運動」が、死せる物質の段階から「有機体」の形成へと発展をとげ、「有機体」の形成の段階において自然は、「自己自身に帰還し自分の内部で完結する」、つまりは「精神」が生み出されると考えている。

(注8) ここでいう、「魔術的な意識の状態」とは、ボルノーがその前に述べている「無意味なものが運命ないし偶然として、人間生活のなかへ侵入する場合に、その無意味なものからもなお解釈して意味をとりだし、そしてそれを解釈して生のなかへ引き入れること」を指していると考えられる。

(注9) 大澤(2008)は、「自主的秩序の生成に可能性を開く必要条件」(P209)として「最適な自主的な秩序が何であるかをすでに知っている超越的な『第三者の審級』が存在しているということ(略)、想定することができること、これである。」と述べる。子どもと向き合う大人として、大澤(2008)のいう「第三者の審級」の存在を想定できるということ、そして「第三者の審級」なるものについて具体的に検証していくことが求められるのではないか。

<引用文献>

- ・無藤隆 幼児教育の原則 ミネルヴァ書房 2009
- ・「朝日新聞」1998年6月10日～12日朝刊
- ・柴野 昌山 しつけの社会学 社会化と社会統制 世界思想社 1989
- ・湯川嘉津美 倉橋惣三の思想－幼児教育史における位置づけ－ 日本保育学会第67回大会講義資料 2015

- ・小倉定枝 子どもの「主体性」を巡る保育者の「葛藤」に関する一考察 日本保育学会第67回大会発表論文集 264 2014
- ・倉橋惣三 フレーベル 倉橋惣三選集第1巻 フレーベル館 p.306 1938
- ・長田 新 『フレーベルに還れ』大八洲出版 1949
- ・荘司雅子 『フレーベルの思想と生涯』 玉川大学出版部 1975
- ・酒井 玲子 『わが国にみるフレーベル教育の探究』 共同文化社 2011
- ・倉岡 正雄 『フレーベル教育思想の研究』 風間書房 1999
- ・O.F.ボルノー、岡本英明訳 『フレーベルの教育学』理想社 1952
(Otto Friedrich Bollnow, Die Padagogik der deutschen Romantik: von Arndt bis Fröbel, Stuttgart 1952, 2. Aufl.1967の序論と第三部の訳出)
- ・フレーベル、荒井武訳 『人間の教育(上)(下)』岩波文庫 1964
(Friedrich Fröbel Die Menschenerziehung die Erziehungs=, Unterrichts=, und Lehrkunst, angestrebt in der allgemeinen deutschen Erziehungsanstalt zu Keilhau,1826)
- ・F.W.J.シェリング、松山壽一訳 1797 『自然哲学に関する考案』、『シェリング著作集』(第一巻b) 燈影舎
- ・G.W.F.ヘーゲル、長谷川宏訳 『精神現象学』作品社 1807
- ・木田元 『現代の哲学』講談社 1991
- ・同 『反哲学史』講談社 1995
- ・同 『私の哲学入門』新書館 1998
- ・カール・ローゼンクライツ、中野肇訳 1983 『ヘーゲル伝』みすず書房
- ・村岡晋一 『ドイツ観念論』講談社 2012
- ・仲正 昌樹 『集中講義！日本の現代思想 ポストモダンとは何だったのか』NHKブックス 2006
- ・矢野智司 『幼児理解の現象学』 萌文書林 2014
- ・青木美智子 「20世紀ドイツにおけるフレーベル思想のロマン主義解釈を巡って -遊戯概念を中心に-」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』第48巻 2008
- ・大澤 真幸 「正義」を考える－生きづらさと向き合う社会学 NHK出版新書 2011
- ・大澤 真幸 自由の条件 講談社 2008